

宮澤賢治センター通信

(岩手大学内)

(題 字/金森由利子)

第 6 号

発行人

〒020-8551
盛岡市上田四丁目3番5号
電話 019-621-6672
FAX 019-621-6493
宮澤賢治センター(岩手大学内)
発行責任者 岡田幸助

目次

- 巻頭言 副代表挨拶……………1
- 賢治センターの歩み……………2
- 「第三全国宮澤賢治
学生大会」開催報告……………2～5
- 定例研究会の概要
「ミニ・茶話会」便り……………6～10
- 経理ムベキ山登山……………10～11
- 賢治と音楽の会便り……………11
- 宮澤賢治記念短歌会……………12
- 保阪さん一行を迎えて……………13～16
- 編集後記……………16

巻頭言



一 層多様な関心を集めたい ～今までの整理とこれからへの祈り～

宮澤賢治センター副代表 望月善次

本センターも発足して三年めの活動の半ばを越えようとしている。

本年度は、代表も望月から岡田幸助代表となり、平山健一・藤井克己前・現岩手大学長を初めとする多くの皆様の御支援のもと着実な歩みを行っていると考えている。

以下、あくまで個人的感想であるが、今までの活動を整理し、これからの活動についての祈りを四つの点から書き記すことにしたい。

一 原点としての八賢治への多様な関心

平山健一前岩手大学長の決断によって発足できた本センターであるが、八宮澤賢治への多様な関心を集めることをその願

いとして来た。端的に言えば「学術的研究を尊重するが、それにとられない多様な関心」を集めようとしたのである。(学術的なことに関しては、宮澤賢治学会イーハトーブセンターがあり、このことのバッティングは避けたいたいという思いもあった。)

二 中心としての定例研究会と学生の活動

中心として考えたのが、定例研究会と学生の活動であった。まず、「研究会」である。

「一」では、「学術的なことにとられない」ことを掲げたが、大学が主体となるセンターが「研究」と無縁であってはなるまい。そうした意味において「定例研究会」は、本センターの生命線である。幸いに、発足

以来「月例」を守りつつ今日に及んでいる。話題提供者も多彩な方々に恵まれ、姉齒グループに支えられた終了後の茶話会と共にすっかり定着した。有り難いことである。「一」の留意点があるから、「研究」を広義に捉えるという基本線は外せないが、今後也有着実に積み重ねて行くことが、本センターの基本線であることを、繰り返ししておく。

(賢治の「注文の多い料理店」にちなんで、一つ「注文」をつけておけば、最近30分発表、30分質疑の時間を守らず、質疑の時間を使い切ってしまう話題提供者が多いことは気がかりのことの一つである。「話題提供」は、質疑によって完結するのであるから。もう一つの「学生達の活動」

は、本センターの目玉的事項である。具体的に目指したものは、「全国宮澤賢治学生大会」の実現であった。既に第1回、3回大会(2006、2008)が実現したのであるが、第1回(2回委員長稲垣大助(教育学研究科)、第3回委員長飯村裕樹(教育学部)の両君と二人を中心に大会を成功させ、その活動を発展させた学生諸君及びそれを支えてくださった多くの皆様に改めて感謝と敬意を払いたいと思う。

三 八多様な関心Vの試み

八多様な関心Vは、通常の学術的なものに止まってはなるまい。そうした意味で、「できる人が、各自が独自に工夫・実行し、センターはできる範囲で支援する。」という基本線は今後共堅持したい。現在のところは、具体的には「経理ムベキ山登山」「賢治記念短歌会」「レコード鑑賞会」等に止まっているが、こうした試みがもっと多様

に行われることが必要だろう。

四 役員交代制への祈り

役員についても、「3年連続を限度とする」ことを確認している。できるだけ多くの方々に関わりをもつて欲しいからであった。来年度は、その適用初年度となる。既に内定しているところでも、望月の他、中村事務局長、須藤理事等はその内定者となっている。(交代と言え、前号までの本通信の編集長向井田薫理事の献身も忘れることができない。いづれにしても今回の「巻頭言」もこうした交代期の意味合いも込めて、「今までの纏めをしておきなさい。」という、岡田代表からの提案だとも受け取り、お引き受けした。)

こうした役員交代により、新しい人事が行われるわけで、そこにまた新しい可能性が発生することは歴史が証明している。来年度は、岩手大学創立六十年周年となる。創立記念日の六月一日を中心とした記念行事には、賢治に関わる企画も進行していると聞いている。本センターの試みも、そうした企画を支え、それによって八賢治に関する多様な関心Vが一層豊かに展開されることを祈るものである。

賢治センターの歩み

(平成20年8月以降)

事務局会議・役員会

当センターの円滑な運営を図るため、毎月一回ずつ事務局会議と役員会を開催しています。

定例研究会

当センターの主要事業として、平成18年6月の第1回以来、毎月一回を目標に開催しています。本号では平成20年8月29日の第24回から、平成21年1月23日の第28回までの開催概要を、6頁以下に掲載しました。

「二茶話会」

定例研究会は質疑応答を含めて一時間となっていますので、一寸物足りなく思う人も多いようです。そこで一昨年の7月以降、研究会終了後に茶話会を毎回開催しています。ビールやコーヒーを飲みながらの打ち解けた雰囲気での一時間の懇談は、参加者の好評を得ています。(詳細は9頁に記載)

第三回全国宮澤賢治学生大会

昨年11月1日(土)と2日(日)の両日にわたり開催されました。1日は岩手大学農学部総合教育研究棟7番講義室を会場に、開会式、基調講演、研究交流、岩手

大学生による賢治に関する人形劇・朗読・音楽、全国宮澤賢治学生研究会活動報告、パネルディスカッション、閉会式、キャンパス内「インシーズン」にて懇親会が行われ、2日は実地研修が行われました。(詳細は2頁以下に記載)

全国宮澤賢治学生研究会

岩手大学・岩手県立大学・盛岡大学を会場として、毎月定例的な研究会と読書会を開催しています。

宮澤賢治記念短歌会

当センターの発足以来、賢治ゆかりの百年記念館を会場に、望月先生の指導を得ながら、毎月欠かさず例会を開いていきます。現会員は男女各々6名ほどです。(詳細は12頁に記載)

「経理ムベキ山」登山

「経理ムベキ山」とは、賢治が「雨ニモマケズ」手帳に書き残した32の山のひとつです。そのうち昨年10月5日(日)に岩手山に登りました。参加者は18名でした。(詳細は10頁に記載)

賢治と音楽の会

昨年4月以来、賢治が楽しんだであろう音楽を再現する会を、賢治ゆかりの百年記念館を会場に、毎月開催しています。(詳細は11頁に記載)

「第三回全国宮澤賢治学生大会」開催報告

進化した学生大会を振り返って



飯村 裕樹

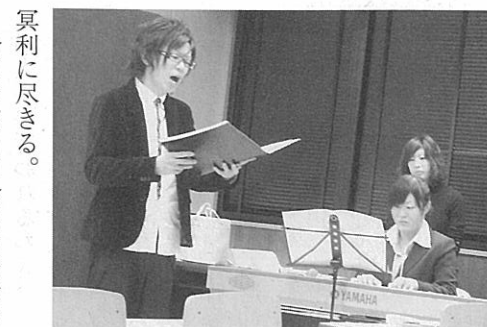
◆プログラム◆

〔第一日目〕(11月1日)

- 9:00 受付開始
- 9:30 開会式
- 10:00 基調講演「宮澤賢治の信仰」栗原敦先生(実践女子大学教授)
- 11:35 研究交流①「心霊科学の実験」として「銀河鉄道の夜」初期形群」横浜国立大学教育学部4年 構大樹さん
- 12:00 休憩
- 13:00 岩手大学生による賢治に関する人形劇・朗読・音楽「雪渡り」の世界を中心に
- 14:10 全国宮澤賢治学生研究会活動報告
- 14:40 パネルディスカッション「小中高大学生がみる宮澤賢治」
- パネリスト・工藤琴子さん(船橋市立法典小学校5年生)、山形侑史君(花巻市立花巻北中学校3年生)、長塚竜生さん(宮城

〔第二日目〕(11月2日)

- 9:00 集合 12:00 解散
- 実地研修「盛岡の賢治縁の地をめぐるバスツアー」
- 今回の感想を一言で表わすならば、「たくさんの人に足を運んでもらうことが出来てよかった」という一言に尽きる。大会の受付の名簿は私が経験したことのないほど、皆さんの名前で埋め尽くされ、会場は一時立ちごめられた。本人が出るほどの盛況であった。本大会に実行委員



歌う新山隆樹さん

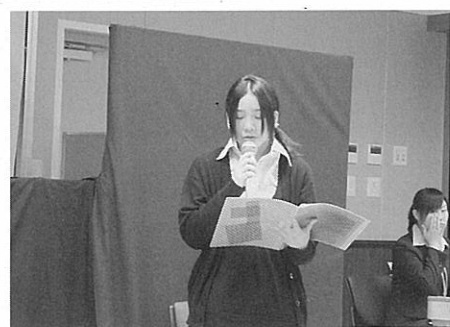
冥利に尽きる。

今回の第3回全国宮澤賢治学生大会の大きなテーマは、多くの人に参加していただくこと、宮澤賢治を身近に感じてもらうことである。第2回までの本大会は、賢治を研究する学生や先生方、賢治に研究的に興味のある一般の方のための大会を目指していた。しかし、第3回の実行委員会では、その点に関して改めて議論をし、大きく方針を転換することを決定した。そのために新たな企画を二つ構想段階から準備していた。ひとつは、幅広い年代の人に宮澤賢治に関心をもってもらうための「人形劇・朗読・音楽」による発表のセクション。そして、小中高大学生という縦の広がりをもった「パネルディスカッション」である。結果、わかりやすい内容や様々な新たな試みを皆

様から好意的に評価していただくことが出来、大盛況のうちに大会を終えることが出来た。

とくに、「人形劇・朗読・音楽」は「岩手大学生による」ものというのを全面的に押し出し、賢治に関して学ぼうとする学生の姿を皆様に披露することができ、とても充実した企画になったと感じている。人形劇を担当してくれた岩手大学パペット☆キッズのメンバーとは、発表の4ヵ月前から綿密な打ち合わせを重ね、本大会の実行委員とともにこの大会を盛り上げるために様々な苦心をいただいた。新たな企画ということもあり、様々な不安もあったが、ひとまず成功に終わり、現在は次回の構想を模索中である。

「パネルディスカッション」についても述べておこう。本大会の中で一番盛り上がったと



永訣の朝を朗読する及川友理恵さん



パネルディスカッション

いつても過言ではない。賢治が本大会に大好きな「雨ニモマケズ」を暗誦した千葉からの「トンデモナイ」小学生の工藤琴子さん。本大会に将来が楽しみである。賢治の地元花巻から、賢治のような素朴さをもった中学生、山形侑史君。この二人がいてくれたからこそ、今回の「パネルディスカッション」が大成のうちに終えられたと私は思っている。そして、賢治に影響され、自らも創作をする宮城の高校生長塚竜生さん。宮崎からはお越しいただくことが出来た、宮崎大学大学院生の黒木豪さん。この四人が創り出す流れに、会場全体も巻き込まれる形で、有意義な時間を創り出すことが出来たことはこの上ない喜びである。

ところで、前回の大会同様に、短歌大会も盛況であった。

その結果についてここに示すこととし、ご報告とさせていただきます。

◆最優秀賞

君がほら教えてくれたあの線路空をみつめてそつとなぞるよ

岡部和保(横浜市立洋光台第四小学校5年)

◆優秀賞

・極北の熊救うためできること
教えてほしいグスコブドリ
田端みずき(岩手大学教育学部附属中学校2年)

・キラキラ汽車ポッポボキラ
キララシュッポッポガタン
ゴトンと
大清水敦史(花巻市立花巻北中学校)

◆奨励賞(14首)

・じよばんにと かんばねららが のれつしや ぎんがの なかを ちずもみないで
たかはしと(花巻市立花巻小学校1年)

・けんじさん ばくとかけっこ
しませんか かせにのつたら
ばくははいいよ
なかむらゆうき(花巻市立花巻小学校1年)

・おしえてね きらいなにんじん
どうやって たべたらいい

いの けんじせんせい
ゆかわまゆ(花巻市立花巻小学校1年)

・あつ、あそこ さんがつづいて だんすしている
ふくおかあい(花巻市立花巻小学校1年)

・やまねこけん いっぱいのどあ こんには ひらいていくたび さやならばかり
おおうちなこ(花巻市立花巻小学校1年)

・「ほんとうの しあわせ」という ことだけど しりたい
ような いらないような
かなやびき(花巻市立花巻小学校1年)

・やまねこの わなにかかってしよんぱりと かえるしんしが やせてみえるよ
さいとうりさ(花巻市立花巻小学校1年)

・さぎたちは よぞらいちめんとんでいる くらいうちうにみるくのように
かわむらすみは(花巻市立花巻小学校1年)

・レストラン いねとはぐれてはいたら ねこがたすきにんげんサラダ
みやざわこうこ(花巻市立花巻小学校1年)

・風が舞い四季の移りを感じとる森も心も深きこの郷



工藤琴子さんと山形侑史君

◆学校賞

花巻市立花巻小学校

第四回大会については現在のところ未定であるが、更なる進化を遂げた学生大会を皆様にご覧いただけることと思っております。

学生大会特集



短歌大会表彰式の様子



岡田センター代表による ご挨拶～懇親会～



学生大会 集合写真

新たなる学生大会を ～学生大会は序章から本編へ～



栗原敦先生による 講演の様子

講師プロフィール

1946年、群馬県生まれ。東京教育大学大学院修士課程修了。
立正女子大学講師、金沢大学講師、同助教授を経て、現在、実践女子大学教授。
研究分野は日本近代文学。
日本近代文学会理事。昭和文学会常任幹事。『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房）編集委員。
編著に『宮澤賢治・童話の宇宙』（日本文学研究資料新集26）（1990、有精堂出版）、『宮澤賢治—透明な軌道の上から—』（1992、新宿書房）、『詩が生まれるところ』（2000、蒼丘書林）、『文学探訪 宮澤賢治』（2005、NHK出版）、共編著に『小沢俊郎宮澤賢治論集』1～3（1987、有精堂出版）、『向田邦子・映画の手帖』（1991、徳間書店）、『宮澤賢治入門』（1992、筑摩書房）、『二荊自叙伝』（2005、岩波書店）、『新編 宮澤賢治歌集』（2006、蒼丘書林）などがある。

小中高大学生パネル・ ディスカッション



人形劇 「雪渡り」の様子

定例研究会の概要

第24回 8月29日(金)

▽会場 農学部2号会議室

▽講師 岩手県立大学教授

藤田ハミド氏

▽演題 「賢治の心象世界をたずねて—コンピュータで再現をめざす—」

▽司会 中村 安宏

参加者 37名。

宮澤賢治は、子供のみなならず大人の想像力をも夢中にする偉人である。潜在意識への賢治の探索や、詩、小説、心象スケッチの語彙を通して語られる「宇宙空間と時間」は、彼の生涯を通じて得られた人間の想像力や世界との交流の結果を示している。そんな彼の心象世界をたずねてみたい。

1970年代、科学者であり哲学者である、ジェームズ・ラブロック（1919—）によって、「ガイア理論」が提唱された。ラブロックは、地球上の全ての自然は、人間を含めて1つの大きな生命体であると考えた。地球は常に最適なバランスを保ってきた。我々人間も、心

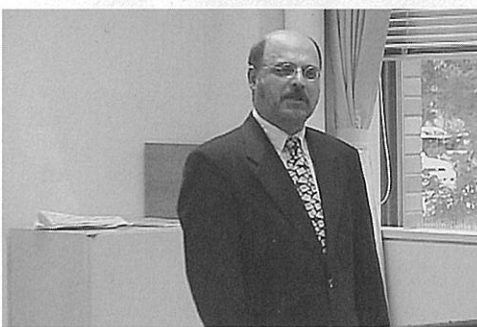
理的、肉体的なバランスを保ちながらあらゆる生命の中で生きている。風、空気、太陽すべてが生命のサイクルを繰り返している。この生命のサイクルは、まさに人間と地球の美しいハーモニーと言える。科学に基づいて創造された賢治の作品背景にはこの生命のハーモニーを強く感じる事が出来る。自然共存の道を探り続けた科学者でもあった賢治の心の中にもまた、ガイアの存在が描かれていたのではないだろうか。

一方、ゲシュタルトに代表される社会心理学において、万物は小さい物の集合であるという思想がある。あらゆる部分を組み合わせたGoodForm（良い形）の実現である。賢治の作品からも同様の考え方が感じられる。現代のインターネットの構成も小さい物の集合であるといえる。

現代社会では、来るべき高齢社会に向け、あらゆるコンピュータ（機械）の活用が考えられる。しかし、コミュニケーションの全てを機械に頼り、感情を明確に表現できない子供が

増加している。これは、機械と人間の「バランス」が崩れてしまっているからである。このバランスを戻すためには、機械に人間の感情や認知を取り込む事により、人間が機械に合わせるのではなく、機械が人間に合わせる必要があると考えられる。賢治の世界には、あらゆるものが存在し、人間の心に対して優しく子供にも分かりやすい。また、賢治の思想は現代社会の思想に一致している。

これらを背景とし、「宮澤賢治プロジェクト」では、仮想宮澤賢治の開発に取り組んでいる。宮澤賢治の作品は、非常に情緒的なすばらしい物語と想像溢れる世界に住んでいる個性豊かな登場人物に溢れている。仮想宮澤賢治の開発により、賢治のものの見方や考え方を通じて



藤田ハミド氏

彼の魅力的な超自然世界を再現することを可能にする。仮想宮澤賢治は、宮澤賢治の思考や感情を再現したモデルに基づき、訪問者の感情を考慮して思考を推測し、訪問者に合わせた朗読を行う事で、賢治世界の経験を提供する。そこでは、訪問者が賢治の作品のテーマや登場人物、状況設定の中を探索するため、訪問者自ら賢治の作品世界を組み上げていく。その経験は個人的でユニークであり、自身を選んだ方向に展開していく。これにより賢治の人格、イベントの考えや感じ方を体験する事が出来る。

(藤田ハミド 記)

第25回 9月26日(金)

▽会場 農学部1号館2F 大会議室

▽講師 岩手県農村文化懇談

会代表世話人 伊藤 利巳氏

▽演題 「羅須地人協会その後」

▽司会 中村 安宏

参加者 23名。

宮澤賢治は、わずか2年数ヶ月しか住まなかった「羅須地人協会」であるが、そこから放った賢治の光芒は計り知れない。私は、この地（花巻市桜町）で生まれ育ち、祖母、両親、姉をはじめ甥や姪なども、賢治と大きな関わりを持ち、旧制花巻農学校に学び、盛岡高等農林・土壤肥料研究室の助手を短期間ながらつとめた。その後、農業を自営、更に県職員として農業青年の教育や農家指導に40年近く携わることになるが、常に、賢治を想う原点となった「羅須地人協会」について話す機会をいただいた。

1 建物・詩碑の変遷

あの小高い一角には、いま「詩碑・井戸・ギンドロ」が象徴的に残されているが、住人の居ない建物は、私たち子供の「戦争ごっこ」の絶好の遊び場であり、移転後も、詩碑建立後も、淋しい広場に過ぎなかった。

建物は、数奇な運命(?)を経て、現花巻農業高校にその姿を現しているが、高村光太郎氏揮毫の詩碑の詩文脱落事件(?)、「賢治祭」の発祥(協会)の教え子だった私の長兄が参画、「下ノ畑」現地点誤認問題など、そして、私の母は、ある暑い夏、この広場で雑草をむ

しりながら、命を終えたことなど、思い出は尽きない。

2 「協会」の理念その後

賢治がこの地で体を刻むような日々を過ごした数々の実践は、「その後」どのように残されているのか。賢治の思想や作品の背景となった行動の「その後」はどのように展開していったのか。私の主題はそのことであつた。

概説すると、▽(賢治が主事・講義を担当した)国民高等学校↓経営伝習農場(本県では六原・浄法寺)↓現県立農業大学校(金ヶ崎町六原)▽最上共働同村塾(私の次兄が塾生)↓山形自治講習所・南城共働村塾など▽農家の庭先巡回指導を主とした「農業改良普及事業」の発足(今年60周年をむかえた)▽



伊藤利巳氏

3 地域の風土に残るもの

以上のように「外」に広がった賢治の思いは、この地にどのように残されているのか。この地に育った私の大きなテーマなのである。

幸い大内秀明氏(東北大学名誉教授・賢治とモリスの館創設)の発想で、「協会の教え子二世座談会」が開かれ、その記録も出版(賢治とモリスの環境芸術)されたが、一世からの「伝言」として、いま「風土」の中に直接に残されているようなものはない、といえる。

「それでいい」という見方もあるが、私は、賢治の思いがブーメランのように、この地にいつか、やがて、戻ってくることを願っている一人なのである。

(伊藤利巳 記)

第26回 10月29日(水)

▽会場 農学部1号館 大会議室

▽講師 東海学園大学教授

井上 寿彦氏

▽演題 「オツベルは死んだか」

▽司会 中村 安宏

参加者 25名。

1 「オツベルと象」の読まれ方(配布している読み方)は、次のようである。手広く農場を営むオツベルの所へ白象が現れる。オツベルはうまいこと言っ

て象を捕り込み、酷使したうえ、餌もどんどん減らしていく。初めは喜んで働いていた象だが、ついに音を上げ(空の月に助けられて)仲間の象たちに助けを求める。押し寄せ堀から落ちてきた象にオツベルは「ピストルの」ケースを握つたまま、もうくしゃくしゃに潰れてゐた。とあつて明確に死んだと書かれているわけではないが、この最後のところはオツベルの死と捉えるのが普通で、これまでの読み方でオツベルの死を疑つたものは無い。

この幕切れ以外にオツベルが死んだとされる根拠となるのは、「第五日曜」の冒頭、「オツベルか。そのオツベルは、(中

略)居なくなつたよ」である。

2 「オツベルと象」は、第一日曜「オツベルときたら大したもんだ。」第二日曜「オツベルときたら大したもんだ。」第五日曜「オツベルか、(中略)居なくなつたよ。」と、各章が「オツベル」の消息で始まる、オツベル中心に展開する物語である。

第五日曜のオツベルが居なくなつたというのは、書かれてはいないが、聞き手からの「オツベルはどうなったの?」という質問に答えたものであろう。ところが前章の「第二日曜」で語られたのは、手枷足枷の上に食糧も減らされた白象が、オツベルの手荒い仕打ちに「ああ、つかれたな、(略)」と音を上げたところで終わっているのだから、物語を二週間中断されて、やっとその続きが聞ける聞き手は、「白象はどうなったの?」

と聞くのが当然のはずであるのに、語り手はオツベルの消息を語っている。つまり語り手が語ろうとするのは、可哀想な白象の話ではなくて、オツベルの話なのである。読者(われわれ)は白象に同情しつつその流れで読むが、語り手が語ろうとするのは、強引なまでにオツベルの話である。

3 「オツベルと象」は「ある



井上寿彦氏

牛飼ひ」(傍点井上)が「ものがた」についている。「ある牛飼ひ」は、牛飼ひ故に情報をもつただの牛飼ひではなく、「ある」によって特定されなければならない。作者は無駄な登場人物は出さない。従来の読みはこの「ある」を見落としていた。また「ものがた」は、昔話の形式に倣っていると考えられる。

4 「オツベルと象」を語る「ある牛飼ひ」は昔話の形式で語るから、象との対決が大袈裟な表現で語られるのだし、自分の体験を語るのだから、「オツベルときたら大したもんだ。」と自賛するのである。

5 オツベルは死んだのではなく、農場から「居なくなつた」だけで「牛飼ひ」になつたと読むと、これは左傾した作品ではなく、同時期に書かれた「寓話

猫の事務所」に酷似してくる。純粹だが弱い白象とかま猫、権力を振るうオツベルと黒猫、それを解決しようと立ち上がる別次元の月(赤衣の童子)と獅子。6「オツベルと象」はオツベル中心の話だと読み、オツベルは死んでいないと読むと、この反賢治的でありながら「大したものだ」とされるオツベルとは誰かという疑問に行き着く。オツベルとは誰か、白象とは何か。について触れる紙幅が無くなった。できれば拙著「賢治、赤い鳥への挑戦」(青柿堂)を参照してほしい。

(井上寿彦 記)

第27回 12月5日(金)

▽会場 コラボ・MIU
1階中会議室
▽講師 保阪 庸夫氏
▽演題 「杜陵の二春秋―嘉内と賢治の盛岡高農時代―」
▽司会 中村 安宏
参加者 79名。

研究会には保阪氏の登場を待ちわびた皆さんがたくさん詰めかけ12月の寒さの中にも会場には熱気が感じられました。聞くといつもこの研究会の3倍以上の人数が集まったとのことでした。



保阪庸夫氏

講演は保阪庸夫氏が盛岡高等農林学校時代の保阪嘉内の動勢についてまとめた草稿「杜陵の二春秋」を中心に話がされました。

保阪氏が取り上げたのは次の3つの話でした。

■除名放校処分のこと

賢治からの手紙によって嘉内は大正7年3月13日に学校を除名になったことを知ったが、その背後に何があったのか。除名につながったと思われる嘉内の行動について述べながら、このこと(除名)があったおかげで賢治からの73通の手紙が残ったことや、その手紙によって、そこに率直に現れた賢治の人柄がよい面も悪い面も、明るい面もくらしい面も、激しい面も優しい面もよくわかる。

■「真宗聖典」のこと

『漢和对照妙法蓮華経』によって賢治は法華経の世界に入ったが、すぐに法華経の熱烈な信者になったわけではない。賢治が嘉内に贈った本の一つに『真宗聖典』があり、それは大正6年3月に発行されたものである。この本の存在から考えると、この時期に賢治は真宗の教典と法華経を読み比べた結果、真宗から法華信仰へと移っていったように考えられる。

■賢治との二度目の岩手山登山

賢治と嘉内は大正5年6月に岩手山に登山しているが、この時はほかに同行者があった。しかし、その翌年の6年7月の登山は賢治と嘉内の二人きりであった。

嘉内はこの時のことを「岩手山紀行(心のなかの)」という79首の短歌に記しているが、それを読むと、あかりの消えてしまひまるで銀河の中を進むような登山であったことがわかる。その時には、賢治と嘉内は同じ道を進もうとしていた。

やがて賢治は日蓮主義の教団へ入会するが、その教団の考え方に嘉内は違和感を持ったのではなかったか。

そうした話のあと、賢治は感情は詩として発散させ、理論の



三二・茶話会の様子

あるものは物語としてまとめ、解決し得ない黒いわだかまりのようなものは、ただ「南無妙法蓮華経」と唱えることで処理しようとしたのではなかったか――と最後をまとめられました。

(向山三樹 記)

第28回 1月23日(金)

▽会場 農学部1号館 大会議室
▽講師 吉見 正信氏
▽演題 「宮沢賢治の科学思想」
▽司会 中村 安宏
参加者 30名。

本日は、「宮沢賢治の盛岡高等農林時代」のテーマを要請されておりましたが、その時期に培われた「宮沢賢治の科学思想」と題してお話いたします。

それについては、本論に入る前に、いくつかの興味深い関連エピソードをご紹介します。申し上げたいと存じます。(それは省略)

さて、本論ですが、賢治の「科学思想」には、作品に反映して、それは「化学」と「地学」の二相系列で検証されます。

その「化学」は文学上の「ミクロ詩想」、「地学」は「マクロ詩想」の二相系に大別して論証し、措定する次第であります。

「三二・茶話会」便り ―茶一話―

定例会終了後茶話会が行われます。その模様をお伝えしたいと思います。

◎ 賢治さんが眼前に現れる！
そんな計画の発表でした。

賢治さんを視覚的にロボット化して、賢治さんなら話相手の表情や声を見聞きして、どう受け答えをするのか。

これは賢治さんの性格やクセを調べ、それをソフトに組み上げ、コンピュータに入力し、その相手の反応に応じて賢治さんの表情や声が随時適応すると言う大変興味深い試みです。残念ながら当日はまだ作成中との事で、実物を見る事が出来ませんでした。早く見てみたいと思います。

この方式はいろいろと応用活用ができそうです。例えば亡くなったお祖父さん、お祖母さんとの出会いや会話、過去の偉人や尊敬する人と会話をし、或は自身の人生のアドバイスが聞けるとかいろいろ活用が考えられると思います。ともかく作成が大成功である事を祈りました。

◎ 現在、花巻市桜町に「雨ニモマケズ」の詩碑があり、当時、羅須地人協会の建物(現在、花

巻農業高校に移転)として賢治さんが住んでおり、自宅の前を毎日の様に通る賢治さんとお話をした農家の主婦が、お孫さんである本日の講師に当時の事をよく話してくれたそうです。

その講師の方が賢治さんのエピソードを語り、それを聞く我々は、そこに居る賢治さんへ接する様な気分になり、改めて賢治さんの人となりを聞き、賢治さんを身近かな存在に感じました。

賢治さんは絶対に人に物を貰わなかったが、人には惜しげもなく物をくれた。しかしどうして貰ったときは必ずお返しをしたそうです。又、当時としては珍しい洋野菜を植えそれを町に売りに行っても、なかなか売れずよく帰りに人に上げて帰ったそうです。その上、珍しかった白菜等の洋野菜はしばしば盗まれ、困った賢治さんは盗むべからずの杭を立てたとの事でした。なにかほのほのとした賢治像を伺い人柄を偲びました。

◎ 「オツベルと象」の発表で全く考えてもみなかった読み方を聞き「目から鱗」の感でした。最初の「……ある牛飼ひがものがたる」から始まり「おや、「一字不明」、川へはいつちやいけないうたら。」の最後の捉え方に驚かされました。今まであま



(吉見正信 記)

ただし、本日は時間の関係で、「地学」からの《マクロ詩想》は割愛させていただき、註記の参考文献のご参照を乞う次第をお許し下さい。

「化学」における《ミクロ詩想》とは何かというと、それは《コロイド化学》を《詩的に思考》した《詩想》であります。

レジメで列挙したように、「薄明の 膠朧液にとざされて 白雲浴ぶる 七つ森なり」などが目につきます。

賢治によって詩語・詩想化されて、賢治作品に頻出しております。

昭和47年8月、私は賢治高農時代のクラスメイトの成瀬金太郎氏を、東京練馬区のご自宅に訪問しました。そこで拝見し驚いたのは、一葉の写真であります。それは、高農の化学実験室で、クラス全員12名が顔を見せ

ている写真だったからです。それは、賢治短歌の「日下りの 化学の室の十二人 イレキを帯びし 白金の雲」とピッタリ同じ情景と即断したからです。難解だったその短歌を成瀬先生に告げて、何をしていた情景かを教えていただきました。それは、白金を液状化する実験で、液状化した白金極微粒子(コロイド粒子)に電極を入れ、粒子の波状を移動させたりする(電気泳動)などの《白金定性》という《化学実験》のときの写真と、懇切に教えていただいたのであります。

それを機に賢治《ミクロ詩想》に気づき、レジメに挙げた用例のごとく、ライブニッツの「単子論」(モナドロジー)、そして「光素」(エーテル)も然り、仏語の「微塵」を通してのミクロ思考、さらにはその先蹤である譚嗣同「仁」における「以太論」(エーテル論)なども参照

賢治と音楽の会便り

賢治と音楽の会も08年4月に始まり10回を数えました。姉齒さんの提案に私も同調し、今に至っています。参加者は、このほとんど知られていない小集会に、なんと名古屋から毎回参加される方や、仙台そして花巻、北上、雫石などからも参加していただいています。「賢治」さんを愛する方々の広がりを感じます。さて何を鑑賞するかですが、もちろん「賢治さんが聴いたであろう曲を我々も聴こうという会」であることは言うに及ばずです。でも賢治さんの時代と今では約100年の隔たりがあります。クラシックの名曲は100年、200年〇〇何をおか言わんやですがしかし、同じ曲でも時代背景によって演奏の仕方は変わってきます。時代を超えて作曲者の意図を今の時代背景の基に聴き、賢治さんの感動とダブらせるのも音楽の本質かも知れません。でも、できれば賢治さんが聴いたという演奏者で聴いてみたいものです。不肖私は大学に籍を置き、新入生のパソコン利用入門を指導する手前、ネット検索も必要上それなりの腕と自負しています。そ

ここで、世界に張り巡らされたネットを通して賢治さんが聴いたと思われる演奏団体の曲を探し回り、ついに見つけました。オーストリア、イギリス、アメリカなどの正に賢治さんが求めた国々から、1ヵ月、2ヵ月と待たされた末に送られてきました。第一次大戦前後、1910〜20年代は録音技術が大きく変わった時代です。10年代はラッパに向かつて演奏し、底の振動板に付いた針で溝を切るアコースティック録音であったが、20年代ではマイクロフォンから音を入れ調整し、電磁振動で溝を切るダイレクトカッティングの時代へと変わっています。第6回(9月)にハーティ指揮ハレ管弦楽団(1924年)によるドボルザーク(D)の交響曲第9番を第7回(10月)にプフィッサー指揮ベルリン国立歌劇場管弦楽団(1929年)によるベートーベン(B)の交響曲6番を聴きました。いずれもマイクロフォン録音で採録したものでかなり普通に聴けるものでした。Dの9番では「銀河鉄道の夜」や「種山が原」の場面を思い浮かべ、なるほどというテンポの演奏で、賢治の音楽性に触れたと喜び、Bの6番では自然の中を軽やかに闊歩して土壌調査をした賢治の自然や動物達への慈

しみの心が伝わってくる気がしたのでした。第9回(12月)には常連参加者の菊池さんが「やまなし」を朗読し、川底の青い幻灯を楽しみ、また、年末のおきまりBの第9に、今年1年の諸々を連帯の歓喜の歌で締めくくりました。年が明け第10回(1月)ではニキッシュ指揮ベルリンフィルハーモニー管弦楽団(1913年)でBの交響曲第5番を聴きました。アコースティック録音の伝説の1枚です。音楽器は良く聞こえるが弦楽器は弱くまとまって聞こえるもので「賢治が蓄音機のラッパの中に頭を突っ込んで聴いたというのは楽器を開き分けようとするためだったのでは」との意見に皆納得しました。演奏は緩急のはっきりしたもので、冒頭の運動機がジーンと心に入り込んでくるものでした。この後を継いだフェルトペングラも始めはニキッシュと似た演奏スタイルだった(これも賢治は持っていた)と言われていました。この会も10回を越えますが、急がずのんびりと賢治と音楽の世界へ、いま一歩近づきたいと思っています。これからでも十分間に合います、一緒に聴いてみませんか。

(小野伴忠 記)



賢治短歌碑の前で

時十四分まで下りていなくてはならない。ここから七合目、八合目はすぐ。ここまで登れば立派に岩手山に登った事になります。五合目に下りて食事となる。頂上までの未練は残るが、お握りを頼りながら「こんなことはじつにまれ」なる眺めを堪能する。この日に誕生日を迎えたという参加者を囲み、みんなでばんざいをしながら、記念撮影をする。下りもゆっくりゆっくり。私は下りが弱い。珍しい草花の名前を教わりながら、笑う膝をなだめなだめ滑らないように下りる。後ろから来る登山者には、「どうぞどうぞ」と先を譲る。どう見ても私たちがより年配者であるらしき人たちが、お礼を言いながら、あつという間に姿を消す。何と達者な事かと感心をする。無事下りきって、先に下りていた三人と合流をした。望月先生より登山口の歌碑「岩手山」いただきにして、ましろなる／＼に火の花の浦き散れるかも」の解説をしていただき、この日の登山の締めくくりとする。まさに「経埋ムベキ山」登山に相応しい賢治日和の一日が暮れようとしていた。

(佐藤静子 記)



茶話会にて、手前から大明さん、向山さん、阪阪さん、新村さん、平山元学長

り考えず読み飛ばしてしまつた事を改めて知らされました。「何が「川へはいつちやいけない」のか、「何が」をよく考えなくては「オツベルと象」を読んだ事にならないとの指摘を受けたような気がしました。又、一般的なオツベルは死んだと言う読み方を、しかしオツベルは死んでない」と言う講師の考えを聞き、なるほどと言う思いもあり、「オツベル」とは誰か、又、「白象」とは何かとの問いに一つ一つ深く考えつつ、読む姿勢を改めて教えられたおもしろい。賢治さんの作品は多様な読み方が出来る事を知っているつもりでしたが、改めて考えさせられました。

・ 賢治は法華経に生涯を捧げたと言われるけれど、但、氣遣いの様にのめり込んだのではなく、浄土真宗の「真宗聖典」を読み、同時期に「漢和対照妙法蓮華経」を対照しながらよく考察検討し、間違いないと思いで日蓮宗に入っていたとのこと。

賢治の様に慎重で科学的考えをする人が、但感情的に法華経に入った訳ではない事に改めて納得をしました。

・ 現在賢治の手紙やハガキ等が73通保管されているが、それは嘉内が大正12年8月、一旦それまでの物をまとめたものであり、現在も蔵の中を探せばもっとあるかも知れないとのこと。

・ 文芸誌「アザリア」の題を検討中、議論になりもつと盛岡に關係した題はどうかという案

も出た。

小菅氏が「アザリア」でいいのでは」と言った時、賢治が「そうだ、そうだ」といいそれで決定したとの事でした。

賢治は何事にも決してしゃべらない性格でしたが、賢治が発言すると不思議にみんなが納得する、そうゆうものを賢治は持っていたそうです。

◎ 盛岡高等農林学校時代から賢治の思想は驚くべき広がりを持つており、それらを短歌に託し表していました。

化学的、地学的、宇宙論的、量子論的、仏教的等々。又、吉見先生の発表も賢治のミクロからマクロまでの広がりがあり、掴みきれない世界、賢治の世界を教えて頂いた様な気がしました。その中で、賢治研究が地元で空洞化して居るもつと活気が有ればとの言葉に同感しました。又、賢治の教え子であった及川留吉(福田パン)さんについて残念な思いをしています。それは福田さんがお元気な頃、縁有って時々尋ねていました。でも当時はあまり興味がなく、今思えば貴重な機会を失った事を後悔しています。

尚、茶話会はいつとも女性陣のスタッフに頑張つて頂いており、感謝しております。

「経埋ムベキ山」第4回 岩手山登山

九月末、岩手山に初雪が降った。第四回「経埋ムベキ山」岩手山登山は十月五日である。登れるのだろうか少し不安であった。

当日、空は快晴！まさに絶好の登山日和となった。登るのは馬返しコースである。今回も盛岡山友会の江刺家さんの指導で、望月先生他十四名(学生四名)の参加であった。初めて岩手山に登る人、数十年前に登る人それぞれである。私は十二・三年ぶりの岩手山であった。

先導は姉齒さん。江刺家さんの助言で一歩一歩踏みしめるように、ゆっくりゆっくりと登る。初めはスロー過ぎるよう感じたが、実はこれが絶妙な速度であった。いつもなら三日は苦しむ筋肉痛が、今回は次の日少々痛む程度で終わったのである。

二合目半で一人が体調不良のため、学生二人の付添で山を降りた。その後は順調に五合目まで登る。山腰が美しく紅葉している。正面には優美な姫神山、下方には鞍掛山。上から見下ろせば鞍掛山は何と可愛い山で

ある事か。麓には緑と黄色のコントラストの美しい大地が広がり、ゆったりとした時間までが見えそうである。真つ青な空には一本の飛行機雲、岩陰にはまだうめばちそうが咲き残っている。何と白い蝶蝶が一匹ひらりと飛んでいた。

こんなに美しい眺めは滅多にお目にかかれませんが江刺家さんが言われる。ここで望月先生が一言、「こんなことはじつにまれです」。

月水銀 後夜の喪主／火山礫は夜の沈殿／火口の巨きなめぐりを見れば

だれもみな愕くはずだ／



一合目 江刺家さんと望月先生



杜陵小学校のやまなしの木

山梨（やまなし）と 岩手（ぎんどう）の交流

盛岡市安倍館町
向井田 薫

昨年の十二月五日に、山梨県
市町の保阪庸夫さん一行をお
迎えました。

保阪さんの岩手訪問は、当セ
ンター・12月定例研究会の講演
が主目的でしたが、「山梨と岩
手の交流の促進」のため、『保
阪嘉内・宮沢賢治アザリ記念
会』の向山事務局長、新村会計、
さいたま文学館・大明主任学芸
員の三人が同行しています。
「岩手と山梨の交流」を最初
に果たしたのは、杜陵小学校の
平成十六年卒業生の49人でし
た。自分たちが働いたお金で、

保阪さん一行を迎えて

賢治の「やまなし」にちなんだ
「やまなしの木」を学校に残し
たい。その希望を叶えてくれた
のが、山本・山梨県知事です。
平成十九年十月の「花園農村
の碑」除幕式には「ギンドロの
苗木」を達増岩手県知事が贈呈
（石田紘子元校長が出席）し、
去年の四月には平山健一岩手大
学長以下が市を訪問。十月
十八日の「碑前祭」への岡田代
表出席が続いています。

保阪庸夫さんは、宮澤賢治の
心友・保阪嘉内の次男で、長男
の善三さんと共に嘉内が大事に
整理・保管していた「アザリ」
の仲間と交わした書簡や、数多
い嘉内の文芸作品を、広く世間
に紹介しています。

【岩手県庁から岩手大学へ】

一行は最初に、岩手県庁に達
増知事を表敬訪問しました。折
から県議会の開催中で、昼食前
の短時間でしたが、少年時代か
ら「賢治作品が好きだった」と
話す達増知事に、賢治と嘉内の
友情を伝える73通の手紙を「岩
手と山梨の共通財産」として
と庸夫さんが述べました。知事
の日程に合わせ、前夜東京に宿
泊し早朝に出立した一行に、多
くの報道陣が押し寄せました。



賢治の井戸

午後は、当時の石田校長先
生の案内で、杜陵小学校の訪問
です。校長室では校章が焼き付
けられた紅白の「杜陵小饅頭」
を頂戴し、体育館のステージか
ら、ガラス越しの盛岡城址の景
観を眺め二度ビックリです。

山梨県から頂戴した「やまな
し」は二本が校庭に、一本が岩
手公園の「賢治詩碑」の傍らに
植えられています。杜陵小学校
の校庭は、中津川の毘沙門橋に
より公園の広場まで繋がってい
たのです。一行は、「やまなし
の木」が、杜陵小の生徒の愛情
に包まれながら、順調に育って
いるのを夫々の目で確認したよ
うです。

その後岩手公園から下の橋に
向かい、賢治の下宿跡と、嘉内
が毎週のように通い続けた下の
橋教会を眺めた後に、NHKの
盛岡放送局と岩手大学へ向かい

ました。

【岩手大学から小岩井農場へ】

講演を無事に終えた保阪さん
は、翌六日小雨降る農学部構内
を散策しました。賢治と嘉内を
偲ぶ旧本館は、国の重要文化財
として現存しており、二階の講
堂には、嘉内を退学処分とした
第二代佐藤義長校長の大礼服姿
が飾られていました。
「数回は訪れている」と話さ
れた保阪さん。佐藤校長の肖像
画を、柔らかな表情で眺められ
いたその横顔が忘れられませ
ん。

午後は小岩井農場の訪問で
す。「ぎんどう」の産地です。
賢治と嘉内の縁の地です。盛岡
は雨でしたが、岩手山麓の農場
は一面の雪景色でした。
環境緑化部では、賢治研究家
の岡澤敏男さんが当日の盛岡タ
イムスを広げながら、アザリア
の仲間が歩いた「雪石歩行」の
解説を始めました。

野沢裕美資料館長の案内を最
後に、小岩井訪問を終えた一行
は、再び盛岡に引き返したよう
です。

「茅町（現在の材木町）鎌田
様方」の、嘉内の下宿跡を訪ね
られ、北上川の細波を聞きなが
ら、九十年前の往時を偲ばれた
様子です。

宮澤賢治記念短歌会報告

和やかに、着実に

望月 善次

この会の目的は短歌を上手に
なることではない。

宮澤賢治の盛岡高等農林時代
の文学活動の多くが「短歌」で
あったことに鑑み、その「短
歌」を参加者達も作ってみて、
△内側から賢治を実感する△一
助にすることを願っているのだ
である。

既に今までの会報に報告して
もいるところでもあるが、会
は、月一回、原則として土曜日、
会場は「百年記念館」、内容的
には、このことを中心とした活
動を行っている。十五分程度の
望月の「賢治短歌の話」と一時
間程度の歌会である。
例会については、発足以来、
月例会を休まずに続けているか
ら「着実に」歩んでいると言っ
ていいだろう。

歌会の方は、事前にその月の
担当者に作品を提出し、当日
は、担当者が作者名なしの作品
一覧を配布し、選歌、コメント
と続くことになる。具体的進行
は、その月の担当者に任せられ
ているが、最近では、参考図書と

して紹介した永田和宏『NHK
短歌作歌のヒント』（日本放送
出版協会、二〇〇七）に共感し
た姉齒武司提唱もあり、△「良
い作品」から「何か言ってみた
い作品」へ△が一つの流れと
なっている。

担当者の如何にかかわらず、
会そのものは、「和やかに」行
われているというのが報告者の
感想である。

ところで、今回の報告の核心
は、北田まゆみ、佐藤静子お二
人の選による作品である。お二
人とも口を揃えて「選ぶことの
難しさ」を言っているが、「選
ぶ」ことによって、「編集」活
動の内側に入ってもらいたく、
この営みによって賢治短歌をよ
り深く理解する機縁にしてもら
いたいものだという祈りのこと
を付け加えておこう。

北田まゆみ 選

姉齒武司（盛岡市）
移る世に自我不変（われ
かわらじ）と思えどもつ
まづき落すはそがオイお
い老い

阿部眞紀子（盛岡市）
三日月の上に寄り添う星
ふたつ師走の空のスマイ
ルマーク

飯村裕樹（岩手大学教育学部3年）
教室の隅のどこかに隠れ
てる知らない君を今日も
また知る

大林あや子（盛岡市）
こぼれ落つる蕎麦の実ひ
とつ育らいて白花ゆらり
夕映えのなか

北田まゆみ（盛岡市）
バスの揺れ物ともせずに
若者の携帯メールの指の
確かさ

小菅アイ（盛岡市）
家横に空地の草は丈高し
路ゆく人の帽子が見ゆる

昆明男
伊勢の宮外宮内宮別の宮
煙草吸う人あらずや日本

佐藤静子（盛岡市）
くいくいと母の乳吸う嬰
児（みどりご）の足の親
指くいと反りおり

平田眞子（岩手大学教育学部四年）
襟足をくすぐる風が嬉し
くてストールを巻く秋が
始まる

向井田薫（盛岡市）
空高く我が家のトマト仲
び行きぬ賢治の精神（こ
ころ）偲ぶこの頃

望月善次（盛岡市）
人生の終わりの形見えな
がら見るまい見ぬぞ見ず
見たくなし

吉田直美（盛岡市）
焼き餅のほんのり温きを
頬張れば秋の匂いす上賀
茂の八月（なつ）

佐藤静子 選

姉齒武司（盛岡市）
解つてゐる！具合悪さを
「不摂生よ」と妻の一言
憎くき一言

阿部眞紀子（盛岡市）
外見から想像できぬ紅の
賢治の恋か新種のりんご

飯村裕樹（岩手大学教育学部3年）
届かない水を優しくかけ
ているどうにもならない
昼過ぎの夏

大林あや子（盛岡市）
こぼれ落つる蕎麦の実ひ
とつ育らいて白花ゆらり
夕映えのなか

北田まゆみ（盛岡市）
「もう、いいか！」カチ
リとペン先片づけて一行
短歌立ち上がりおり

小菅アイ（盛岡市）
雨やみし庭に剪定する我
が子鉄をさばく音定まら
ず

昆明男
タマナとは玉の葉つ葉と
言う君の顔はいきなりモ
リオカ顔

佐藤静子（盛岡市）
もう少しゆっくり歩いて
ゆつくりと幼な眼にゆ
るる秋の陽

平田眞子（岩手大学教育学部四年）
襟足をくすぐる風が嬉し
くてストールを巻く秋が
始まる

向井田薫（盛岡市）
もつと掘れモットモット
と深く掘れ猫の額の狭き
菜園

望月善次（盛岡市）
海上に立つ幻を吹く風の
朝の朝風、夕の夕風

吉田直美（盛岡市）
首筋にインドの牛の重さ
在り瘤持ち座る巨大な牛
が

『保阪嘉内・宮沢賢治アザリ
ア記念会』では、今回の「岩手
訪問記」を、早速ブログに載せ
ています。

岩手県庁編	やまなしの木編	NHK盛岡編	岩手大学その1	岩手大学その2	岩手大学ミュージアム	小岩井農場編
2008-12-08	2008-12-10	2008-12-13	2008-12-16	2008-12-21	2009-01-13	2009-01-20

<http://azalea4.blog.so-net.ne.jp>

保阪氏の盛岡訪問

盛岡市
石田 紘子

一つの扉が開くと、それが次
の扉を開ける鍵となり、次に
も、その次にもと連鎖し、目の
前の世界が次々と拓かれていく
物語が続いている。

六つめの扉は12月5日に開い
た。それは、宮澤賢治の心友・
保阪嘉内のご次男保阪庸夫氏ご
一行（アザリア記念会の皆様4
名）の盛岡訪問であった。東京
で前泊し、昼前の達増知事への
表敬訪問の時間に合わせて到着
された。81才で医師の保阪氏は
出発前まで診察に当たっておら
れたのに、長旅のお疲れは微塵
もなかった。出迎えた私たちは
実現したご来盛を喜び合った。
県庁では、ご多用中の達増知

事に歓待いただいた。保阪氏は岩手宮城内陸大地震を痛み、アザリアの会を代表して義援金十万円を寄付くださった。三つめの扉を開けた岩手の「ぎんどう」の苗木が、岩手県で新しく育つように、両県の交流に新しい枝が増えたように感じた。

午後一番に、杜陵小学校を訪問し、最初の扉を開けた山梨県の「やまなし」の木とご対面された。保阪氏は校庭のやまなしの木を認めると、駆け寄り、未だ細い幹を両手で握りしめ「元気大丈夫」と語りかけた。5分程歩いて、岩手公園の賢治詩碑に寄り添う「やまなし」の木を見付けたときにも同様だった。交流の木となったやまなしへの励ましと医師としての優しさが重なって、私たちの心に響いてきた。

嘉内を盛岡に引き寄せた一つ



比田アナウンサーと打ち合わせ

に啄木への憧れがあった。二の丸の啄木歌碑を巡ってから菜園通りに出て、賢治の下宿先玉井家跡、嘉内が日曜日に通った下の橋教会前で、往時の若き二人に思いを伝えたいと一時を過ごした。

その後NHKに向かい、保阪氏は「おぼんでトーク」の収録に出演された。比田アナの質問に、やわらかな語り口で思い出や賢治の人物像を紹介しながら、嘉内宛の賢治の73通の手紙を「山梨と岩手の共通財産です」と話された。

NHKの後は、嘉内が在籍した最後の年大正7年から90年の時を経て、岩手大学を訪問した。藤井学長にも大歓迎を戴き、在学当時の校友会報や得業論文等もお見せ戴いた。本物の貴重な資料の数々は、同行した私たちをも瞬時に盛岡高等農林時代に引き戻してしまう圧巻だった。

保阪氏の記念講演の時間が近づき移動すると、入り口からもう熱気を感じた。岩手の賢治・嘉内ファンの希望の時であり、講演終了後の質問等も相次いだ。事務局長の向山氏からは「アザリア記念会」の紹介があり、賢治センターとの交流誕生の記念すべき日ともなった。

翌日は、師走の冷たい風雨の

最初の訪問先は岩手県庁知事室、県議会のさなかの文字通り多忙な中、達増知事はお時間を割いてくださり、私たちとの会見が実現しました。

保阪庸夫氏から、岩手市長からのメッセージと震災復興の義援金が達増知事に渡され、達増知事も、子どもたちから賢治作品のファンで「嘉内さんを知って賢治ワールドが広がったと思います」とのお言葉をいただきました。最後は、二人の友情を伝える賢治の七三通の手紙の里帰り展を実現させたいとのメッセージを伝え、会見を終えました。

会見終了後、控室に戻ったところでテレビや新聞からの取材を受けました。

次の訪問先は、盛岡市立杜陵小学校と岩手城址公園にある



藤井学長へパネル贈呈

中、午前は岡田代表のご案内で岩手大学構内、午後は小岩井農場の賢治・嘉内ゆかりの場所を巡るハードな一日を過ごされた。保阪氏は寒さや疲労をまるで感じないかのように、穏やかで熱心でジョークも飛ばされた。盛岡訪問は大きな足跡と余韻を残して終わった。

今、七つめの扉は、青春時代の二人の熱い交友、ほとばしる情熱・苦悩が伝わる「賢治の嘉内宛の73通の手紙展」の盛岡開催の夢に向かっていく。お里帰りする賢治の手紙は、岩手と山梨の交流に大きな花を咲かせてくれるにちがいない。

保阪嘉内と岩手

岩手県総合政策部政策調査監 渡邊 健治
保阪嘉内のことを知ったのは

「やまなし」の木です。石田紘子元校長の努力で山本榮彦山梨県知事(当時)から「やまなし」の苗木が三本贈呈されたことが縁となって、二〇〇七年の「花園農村の碑」の除幕式に、岩手県から岩手市に三本の「ぎんどう」の木が贈られました。この「やまなし」の木がすくすくと育っている姿を見ることが出来ました。

次にNHK盛岡放送局での番組の収録をしました。一時間にわたってのNHK盛岡放送局での収録を終えた一行は、いよいよ岩手大学へ！

まずは大学の本部で、藤井学長に御挨拶。例によって、岩手市長からのメッセージと記念品をお渡ししました。「学長さんは藤井さんとおっしゃるのですか。嘉内が生まれた駒井村のあ



杜陵小学校校長室にて



講演に質問をする参加者

たりは藤井町というんですよ。何かご縁を感じますね」と、話が弾みます。嘉内が盛岡から父親に出した絵葉書を見ながら、談しその後岩手大学の情報メディアセンター図書館に向かいました。図書館では、宮澤賢治・小宮健吉ら大正七年三月に得業した農学科第二部の得業生の得業論文や、賢治が在籍していた当時に発行された「校友会報」などを閲覧させていただきました。そして冷たい雨の降る中を研究会の会場となった産学官連携研究センターに移動しました。講演までの間に会場のロビーで平山前岩手大学長との再会を喜び合ったり次々と訪れる訪問者に保阪氏は慌ただしく応対していました。そして熱気が包まれた会場で保阪氏の講演が行われました。講演終了後参

一昨年の9月、杜陵小学校の石田元校長先生が「ぎんどうの苗木」を探していることを知り、そのお手伝いをしたのがきっかけでした。その苗木は、岩手市で宮澤賢治と保阪嘉内の生誕110周年記念事業に取り組んでいる皆さんが探していたものだったのです。

そもそも宮澤賢治の作品すらろくに読んだことがなかった私ですから、保阪嘉内のことを知るはずありません。宮澤賢治の数少ない親友の一人だったという点も、嘉内が「銀河鉄道の夜」や「風の又三郎」といった賢治の代表作に影響を与えていたことも、新鮮な驚きでした。

そして、同年10月の記念式典の折に、山梨県立文学館で見た賢治から嘉内宛に届いた73通の手紙の一通が私に嘉内を強く印象づけたのです。それは、嘉内が盛岡高等農林学校(現岩手大学)から一方的に言い渡された除籍処分を知らせる賢治の手紙でした。賢治がどんなに辛い思いで書き綴ったのか、手紙を受け取った嘉内の驚き、怒り、悲しみは、90年前に盛岡で起きた理不尽な出来事が今のこのように甦って心が痛みました。

その思いは私だけではありませんでした。人づてに岩手大学の平山学長(当時)にも伝わり、

岩手訪問記 その2

さいたま文学館主任学芸員 大明 敦

訪問二日目の十二月六日は、朝から寒の降る寒い日でした。しかし、「盛岡タイムス」の一面に前日の訪問が大きく報じられていたのを見て、寒さも吹き飛ばす思いがしました。

午前九時過ぎ、私たちはミュージアム見学のために再び岩手大学を訪れました。岩手大学ミュージアムは、ミュージアム本館・農業教育資料館・動物の病気標本室といった展示施設や、自然観察園・附属植物園などの野外施設に加え、学内の至るところに野外彫刻や貴重な樹木・史跡・建造物などが点在しており、見どころが盛りだくさんです。私たちはミュージアム館長の岡田先生に解説していただきながら、まず屋外の施設から見学させていただきました。

最初に拝見したのは自然観察園。賢治や嘉内が在学していたころには、植物園だったところ



農業教育資料館展示室にて

です。大正五年春に賢治や嘉内ら自啓寮南九号室のメンバーで撮った集合写真（嘉内一人が中央で寝そべっている写真）はここで撮影されたもので、園内にはその写真を使ったモニュメントが設けられており、それを見ていると胸が一杯になる思いでした。その後、ひょうたん池、ロックガーデン、オープンギャラリ、上田の鐘などを見ながら農学部へ。賢治と嘉内が出会った旧自啓寮跡地は、現在は郷土森林生態観察モデル林の「自啓の森」として整備されており、その一角には記念碑が建立されていました。

続いて、ミュージアム本館と農業教育資料館を見学しました。いずれも盛岡高等農林学校の名残の建物です。高等農林時代の図書館を改装したミュージアム本館には開学以来の研究成果や貴重な資料・標本などが展示されており、ボランティアの方が誇らしく解説してくださいました。一方、高等農林時代の本館で国指定重要文化財（建造物）でもある農業教育資料館には当時の資料が多数展示されていて、建物の雰囲気と合わせて賢治が学んだころの様子をうかがうことができ、みんなで高農生気分浸って一時を過ごしました。

昼食後はいよいよ最後の訪問地、小岩井農場に向かいました。小岩井に近づくにつれ、雲は次第に雪に変わり、盛岡市街との気候の差を実感しました。言うまでもなく小岩井農場は賢治も嘉内も訪れたゆかりの地で、二人の作品にもうたわれています。その小岩井農場で育てられた「ぎんどう」の苗木が「花園農村の碑」の除幕式に達増知事から贈られ、嘉内の生家の近くに植樹されたことは奇跡のように思えます。嘉内はきっと、「花園農村の碑」を見下ろす丘の上の墓地から、木の成長を楽しみに眺めていることでしょう。

小岩井農場では、苗木を分けていただいた環境緑化部を訪ね、部長の中村さんら関係者の皆様に御挨拶をしました。外は吹雪でしたが、賢治や嘉内も見えた古くからの建物を見学し、資料館の展示を観覧させていただきました。館内では、館長の野澤さんと前館長の岡澤さんのお二人が丁寧に解説してください、あらためて小岩井農場の広大さや賢治とのつながりの深さを感じました。最後に賢治が「本部の気取った建物」とうたった小岩井農場の本部を訪れ、賢治の詩に描かれた風物を思い浮かべながら「アザリア」の友たちを偲びました。



小岩井農場の桜の木の前で

編集後記

センター通信第6号をお届けします。これまで通信の編集にご尽力くださった向井田さんが辞任され、本号は岡田が担当しました。

毎月の定例研究会、第3回全国宮澤賢治学生大会、短歌会、経理ムベキ山登山での岩手山登山、賢治と音楽の会、保阪さん一行を迎えての記事が内容になっています。学生大会の栗原先生の講演要旨や「パネルディスカッション」における各人の意見も掲載したかったのですが、原稿を取り寄せる時間的余裕がなくて失礼しました。

12月5日の保阪さん一行の訪問がきっかけで、岩手大学60周年の記念行事の一つとして「アザリアの咲くとき 賢治と学友たち」の展示会を平成21年6月1日から19日まで情報メディアセンター図書館ギャラリーで開催することになりました。右下の写真はその打ち合わせのために大塚副学長他5名で、2月14（15日）にかけて山梨県韮崎市の保阪庸夫さん宅を訪問したときのもので、保阪嘉内のみならず、小菅健吉（栃木県さくら市出身）、河本善行（緑石、鳥取県倉吉市出身）の資料も展示する予定です。また岩手大学の所



保阪家訪問

有している得業論文や交友会報なども公開する予定です。楽しみにしてください。

4月から役員改選です。事務局や通信の編集作業を手伝っていただける方を募っています。お手伝いいただける方は地域連携推進センター内にある宮澤賢治センター事務局の菊地慧子さんまでご連絡ください。電話は左記に書かれているとおりです。（岡田 記）

宮澤賢治センター通信

○発行

〒〇二〇一八五五

盛岡市上田四丁目三番五号

電話 〇九（六二）六六七二

FAX 〇九（六二）六四九三

E-mail: kenji@iwate-u.ac.jp

宮澤賢治センター（岩手大学内）

発行責任者 岡田幸助

印刷 杜陵高速印刷株式会社